

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3303】

繰り返し同時発話はなぜ生じるのか
—メタコミュニケーションからの日本語異ジャンル間比較—

竹田 らら

本発表では、繰り返し同時発話が起こる理由を、メタコミュニケーションから分析する。日本語女性話者11組の親しい大学生間と11組の初対面の大学教師と大学生による自由対話と課題達成談話を用いた分析の結果、繰り返し同時発話は課題達成談話に多く、自由対話で初対面が、課題達成談話で親しい大学生が多かった。機能では、自由対話で話題を探す際の沈黙の回避が、課題達成談話で内容の共有性の確認が、両ジャンルで相手への同調が見られた。そこから、繰り返し同時発話の発生は、相互行為で1つの物語を共創し、背景知識の共有でコンテクストが予測しやすくなることや、言葉に加え雰囲気やリズムでも、参加者間で理解の一致や共感、状況の共有を示せることが理由に挙げられると指摘した。以上をふまえ、繰り返し同時発話は、参加者間で共通性を明示したり言葉の調子を合わせて共通性を創出したりすることで、協調的に会話に貢献できる有効な手段だと主張する。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3303】

自閉症スペクトラムの症状のメタコミュニケーションへの表出
— 二者間会話の共同構築をめぐる —

合崎 京子

本研究では、自閉症スペクトラム (**Autism Spectrum Disorder**, 以下**ASD**) の症状に挙げられる「状況理解力の欠如」, 「特定の行動への固執」のコミュニケーションへの表出について分析を行った。これらは知的障害のない**ASD**を持つ人のコミュニケーションでは顕在化しにくいといわれている症状であるが、本研究では当事者の自然会話をメタレベルでテキスト分析することにより、上記の症状が可視化される可能性を示した。

会話の構造、及び発話時における非言語行為に着目し分析を行ったところ、本事例において**ASD**を持つ人は、1) 常に相手の質問事項に答えることにのみ集中する、2) 相手が状況をどのように解釈しているか把握していない、と捉えられうる非言語行為を表出していることが示唆された。その結果、会話後のインタビューで、対話者が思うようにやり取りが進まなかったと回答したコミュニケーションにつながった可能性が考察された。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3303】

約束をキャンセルするメールの談話構造
—当日キャンセルのメールの分析—

カムトーンティップ タワット

本研究では、日本語母語話者が書いた約束をキャンセルするメールの談話構造を分析し、目上と対等者へのメールの相違点を検討した結果、次の5つの相違点がわかった。

(1) 半数以上使用されたメールの意味公式は、目上の場合は11種である。対等者の場合は9種で、目上と異なるのは、「終了の挨拶」と「署名」である。(2) 目上の場合は「～について」という表現で件名をつけた人が最も多いが、対等者の場合は「～のこと」という表現でつけた人が最も多い。また、目上に書く際に、全員件名をつけたが、対等者にはつけない人もいた。(3) 目上の場合は「名乗り」を書いた人は半数いるが、対等者の場合は少なかった。(4) 目上に書く際に、謝罪表現の「申し訳ない形」を1回使用した人が最も多いが、対等者には「ごめん形」が1回か2回が最も多く見られた。(5) 「署名」は全ての目上へのメールに出現したが、対等者へのメールには55%しか出現しなかった。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3303】

パフォーマンスとしてのほめ／ほめ返答
—恋人間会話分析—

大塚 生子

本稿では、恋人間で行われたほめ場面(男性から女性)を対象とし、ほめ返答に見られる自己呈示とほめ行為に対するほめの受け手からのイン／ポライトネスの評価を、談話分析を通してGoffmanのパフォーマンスの観点から考察する。ほめ返答では、社会的に適切な自己を呈示するため言語表現・韻律等の操作によってパフォーマンスの作為性を下げて表明するストラテジーが観察された。またほめ否定返答は恋人関係が親密化の発展途上であるため、社会的適切性を呈示する必要があることを示している。一方のほめ行為は特徴的なcontextualization cuesによって習慣化されたフレームにおいて行われる男性のパフォーマンスが固定的であるため、女性に作為の強さを想起させ、インポライトであると評価されていると考えられる。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3305】

ほめ連鎖はどのように終了に向かうのか
—「ほめ」を巡るほめ手と受け手の交渉—

張 承姫

本研究の目的は、ほめの連鎖がどのように終了に向かうのかを明らかにすることである。これまでの先行研究では、ほめの受け手のほめのジレンマ、すなわち、「(評価に)同意/受諾する」か「(ほめの同意による)自画自賛を回避する」という問題から、主に受け手に焦点を当て分析を行ってきた。それに対し、本研究はほめ手の場合も、自分のほめが「受け手に受け入れられる」か、それとも「拒否されるか」という問題に直面するため、ほめ手にも焦点を当て分析を行う。その上、ほめ連鎖の終了はほめの受け手だけではなくほめ手の反応にも密接にかかわっていることを提示し、ほめの連鎖終了は両者の協調によって成し遂げられることを示す。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3305】

彼はなぜ話し続けたのか
—独占されたNS-NNSディスカッションをめぐる内省と会話分析—

中村 香苗

本研究では、日本語母語話者(NS)と非母語話者(NNS)による自律型対話訓練において、2回の議論を独占した一人のNSに焦点を当てその要因を検証する。本訓練では、4、5人の台湾人と日本人の議論を他グループが観察し、議論後に参加・観察グループ各々が議論を振り返り、最後に両グループで評価を共有する。議論や振り返り時の会話の録画データから、特に一人に独占されたグループの2回分の議論、振り返り、観察後の会話を検証した。その結果、NSが1回目の議論の反省から2回目で参加の仕方を変えたところ、却って議論を独占する新たな要因を生んだことが判明した。さらにNSの発話は、他者が次ターンで関連意見を表明しづらい構造になっていることも明らかになった。一人が話し続ける問題は、企業の採用面接時のグループディスカッションでも頻繁に取り沙汰されることから、本研究の結果はNS-NNS間にもNS同士の議論にも示唆に富むものと言えるだろう。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3305】

教室談話の相互行為的制度性
—中学校での授業場面における挙手行動の観察から—

小出 優子, 岡本 雅史

本発表では授業内の「挙手行動」に焦点を当て教室談話の「参加構造」を考察し、そこで明らかとなった構造をもとに、教室談話の制度性がどのように動的に維持されているかを明らかにする。分析の結果、以下のことが明らかになった。まず、IRE連鎖の下位構造として「教師の質問」「教師の挙手誘導」「生徒の挙手行動」「教師の指名行動」という連鎖組織があること、次に、この連鎖組織は授業制度を維持するものとして教師・生徒両者に選好されることである。これまでIRE連鎖では構造上「教師の先導」として一括りにされていた中にも実際には生徒の関与があり、教師と生徒の相互行為が明示的／非明示的にIRE連鎖を組織化していることが明らかとなった。そして「挙手行動」は話者交替システムにおける「次話者になろうとする者による能動的な被選択権の行使」と位置づけられ、授業制度固有の話者交替システムを相互行為的に構築する行動と考えられる。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3308】

日・英語初対面会話に見られる引用ストラテジーと意味の多層性の構築

岩田 祐子

本研究の目的は、日・英語初対面会話で行われる体験談ナラティブにおける語りの中で引用ストラテジーがどう使用され、引用ストラテジーで声の再現を行うことで意味の多層性をどう構築しているかを明らかにすることである。また体験談ナラティブには、体験の内容を表す「指示的機能」と語り手の体験に対する感想や態度を表す「評価的機能」がある(Labov & Waletzky 1967)。引用ストラテジーはこの評価的機能に大きく関わっている。また、会話という相互行為は話し手だけで作るものではなく、聞き手の役割が大きい(Duranti 1986; Goodwin 1986)。実際の会話の中では、体験談ナラティブは相互作用的に語られ、聞き手の関与が欠かせない。分析の結果、体験談ナラティブの構築も、体験談の持つ意味やその評価の構築も、話し手と聞き手の相互行為の中で行われることが明らかになった。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3308】

親族間で運用される他称詞のゆれ
—弱者を救う視点の取り方—

小森 由里

親族間で話し手と聞き手が他の親族に言及する場合に用いる他称詞については、小森(2013)がその運用の実態を明らかにしたが、小森の取り上げた用法を基本的用法とみなすと、その用法から逸脱した他称詞のゆれが生じることがある。和歌山県在住の一親族を対象に参与観察を行った結果、他称詞のゆれ51例を収集することができた。ゆれは、通常では話し手の視点をとるところを、聞き手、会話参与者、場の参与者、談話のトピックの人物の視点が取られ、聞き手の視点をとるところを話し手の視点が取られるという基本的用法とは異なるさまざまな視点が取られるため生じるとみられる。さらに視点のゆれには属性上の弱者と談話上の弱者という2通りの弱者が大きく関わっていることが明らかになった。話し手が発話の場において弱者を見出すと、その弱者の視点をとって弱者に寄り添い、弱者を救済しながら談話を進めるために他称詞のゆれが生じるのである。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3308】

『坊ちゃん』からみた日本語とシンハラ語における肯定・否定応答表現の比較

ウィラシンハ ディリニ

本研究では、日本語の応答表現とそれらに対応するシンハラ語訳を探るために、日本語の小説『坊ちゃん』とその二種のシンハラ語訳本を用いて、日本語の小説に出現した応答がシンハラ語に翻訳される際の翻訳状況を考察した。具体的にいうと、日本語の肯定応答表現の「はい」「ええ」「うん」とシンハラ語の肯定応答表現の「ou (はい)」「haa (はい, 良いよ)」「hari (オーケー)」と日本語の否定応答表現の「いいえ」「いえ」「いや」「ううん」とシンハラ語の否定応答表現の「nae:/nehe(いいえ)」「bae:/behe(できない)」「epaa (いや)」の使用について検討した。その結果、両言語の肯定及び否定応答表現の用法の特徴が分かった。例えば、シンハラ語の「ou」「haa」「hari」等の使用範囲が限られた様相を示しているのに比べると、日本語の「はい」の使用範囲の広さは特筆すべきものである。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3308】

企業経営者との対話を通じたインターン留学生のキャリア探索

横須賀 柳子

本発表では日本企業でのインターンシップに参加した外国人留学生在が、受け入れ先の企業経営者にインタビューをする場面を分析し、インターン生が熟達者から、どのような情報を得て、何を学び、それが自己の価値観や態度などにどのように作用したのかについて検証する。

インターン生たちは、インターンシップ経験から生じた疑問や、熟達者の視点から自分がどのように見えるのかといった疑問などを投げかけ、経営者からプラス・マイナス両面を含めた自身の生き様を率直に開示しながら、ビジネスの厳しさや人間関係の重要性などについて学ぶ。

対話の中で、インターン生が経営者の言説とインターン体験を織り交ぜながら、日本企業についての理解および自己洞察を深化させていく様子が観察された。得られた情報によって自己の価値観が変わり、職業選択の幅を拡大したり、経済的に自立しようとアルバイトを始めたりする態度の変容もみられた。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3310】

言語景観から探るハワイ特有の日本語起源借用語

長門 正大

本研究では、「ハワイ英語」には一般英語では使用されない日本語起源借用語が借用されているという仮説をたて、ハワイでフィールドワークを行った。ハワイには日本語起源借用語を使用した言語景観が多数観察されたため、それらを収集し、OEDに掲載されているかを調べることで、「ハワイ英語」特有の日本語起源借用語が存在することを明らかにした。日系人のみならずその他のエスニシティグループなど不特定多数が受け手になると考えられる、スーパーマーケットなどに見られる日本語起源借用語を用いて陳列されている値札を調査対象とした。結果総語数73、異なり語数57の日本語起源借用語を採集した。これらの語の内、*musubi*, *daikon*, *napa*, *koshi an*, などの40語に関してはOEDに記載されておらず、「ハワイ英語」特有の日本語起源借用語であることが明らかになった。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3310】

在日外国人の母語における日本語借用語『定住語』
—在日外国人向けポルトガル語誌・スペイン語誌からの抽出とその分析—

斎藤 敬太, 志喜屋 カロリーナ

本研究では、従来「デカセギ語」等と呼ばれた在日ポルトガル語話者及び在日スペイン語話者が母語内で使用する日本語借用語について新たに「定住語」と名付け定義し、借用される語彙の傾向及び借用の際の言語学的性質を明らかにすることを目的とした。在日外国人向けのポルトガル語誌及びスペイン語誌の全文から定住語を抽出した結果、“*takyubin*”などの「日本のサービス」、"*arubaito*”などの「仕事関係」、"*Shakai Hoken*”などの「日本の社会制度」といった16分類が確認された。また、借用に際して起こった言語学的性質については、母語では複数の意味を一語で示していたものに、定住語を取り入れることで意味範疇を細分化した「意味区別」（例：*japonés*と*nihongo*）、定住語を母語の文法規則や音韻規則に当てはめた「母語化」（例：ストーブ→*ESTOBU*）、日本語の発音に近づけるための「日本語発音を考慮した表記」（例：*Kokoo*）などが明らかとなった。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3310】

在英邦人との国際結婚家庭における家庭内言語政策とその実態

秦 かおり

本研究は、在英国国際結婚家庭における「家庭内言語政策 (family language policy)」について、談話分析を用いて実態を詳察し、現実に即した家庭内言語政策への提言を行うことを目的とする。本発表では、1) 在英邦人へのインタビュー、2) インタビューに映り込んだ子供との会話、3) 定点カメラで自然談話を録画した映像資料を元に、その家庭を取り巻く環境要因が言語政策に影響を与え、それが子供への継承語教育と日本人妻のアイデンティティに関わることを解明する。

国際結婚の場合、継承語を子供に受け継ぐには継承語母語話者が母語で子供に語ることが大切とされているが、実際には多くの妻達が、子供への教育と夫との会話で板挟みになり、継承語をおろそかにせざるを得ない実態が浮かび上がった。発表では、このデータを元に「子供への教育」と「夫婦円満」との間で揺れ動く女性達のアイデンティティを言語・非言語の側面から詳察を行う。

<<口頭発表>> (3月19日 10:00-12:15)

【3310】

多言語使用児童のtranslanguagingの「社会言語学的」分析
—継承語使用と「声(voicing)」—

山下 里香

複数言語の話者がどのように複数言語を用いるか、またそれぞれの言語の使用がどのような社会的意味合いをもつかは、多言語使用に関する研究のみならず、社会言語学の命題である変異を説明するということと深く結びついている。本発表では、コミュニティ内の自然談話において在日パキスタン人児童が継承語を使用したあるエピソードを、コミュニティのコンテキストおよび会話のコンテキストを踏まえながら分析する。分析の結果、児童らは、**translanguaging**を行い、生活における意味世界をよく理解し、言語活動を通じて複数の言語の間を行き来し、自らの世界観を作り上げているように見える。一方で、データをもって社会言語学的にこのような解釈に至るためには、会話内での言語イデオロギー(language ideologies, Woolard 1992)の存在を踏まえて分析をしなければならない。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3303】

「もし私と会ってデートをしてくれるなら・・・」
— 「逆援」スパムメールをどのように読み取るか—

Peter Backhaus

本発表では、いわゆる「逆援」スパムメールを対象として、それが実際の読者によってどのように理解されるかを考察する。大量のスパムメールを集めて作成したコーパスから4通のメッセージを選定し、それを男女55人の大学生に評価してもらった。評価のカテゴリーは、内容の真実性、言葉の自然さ、返信してしまう可能性である。結果として、メッセージによって評価の違いが確認できたと共に、回答者の性別によっても評価が異なることがわかった。言葉の自然さに関しては、殆ど違いはないものの、内容の真実性と返信してしまう確率の2カテゴリーでは、女性の方は男性よりも高い平均値となっている。発表では、対象の4メッセージの言語的特徴を分析しながら、それがどのように読者の評価に影響するかを考察する。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3303】

バイセクシュアル（両性愛者）への視点
—性的少数者間での序列化の暗示性／明示性—

木場 安莉沙

本研究は性的少数者間の排除や序列化およびそれへの当事者のアイデンティティの関連を、ナラティブ分析による質的研究から明らかにすることを目的とする。

先行研究等では、性的少数者間での排除や差別が取り上げられる機会は比較的少ないが、これらの問題の存在は指摘されている（三橋 2010, 森山 2012など）。しかしながら、その原因としての当事者のアイデンティティ構築についてはいまだ省察されていない。

本発表では多様な性的少数者のインタビューデータの分析結果から、特に両性愛者の排除をめぐるものを取り上げる。性的少数者間での排除／序列化は、性的多数者からのそれと比べて明示的に語られる傾向があり、特に両性愛者への排除に関する語りは個々の性的アイデンティティに応じて多様な様相を呈する。性的少数者の相互排除を考える上で、両性愛者に関する語りが一つの重要なポイントであることを示したい。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3303】

政府刊行物の「わかりやすい版」の言語的特徴
—知的障害者が制度を理解するという観点による考察—

羽山 慎亮, 打浪 文子, 藤澤 和子

本発表では、政府が障害者に関わる法律・施策等を解説するために発行した冊子の「わかりやすい版」6冊を対象に、その言語的特徴を調査した。調査にあたっては、「知的障害のある人の合理的配慮」検討協議会(2015)「わかりやすい情報提供のガイドライン」を参照し、ここに記された「わかりやすさ」のための工夫を言語学的な観点から「リーダビリティ」(文章内容の理解しやすさ)と「レジビリティ」(視覚的な見やすさ)の2つに再分類した。そして「わかりやすい版」の文章が各項目に該当しているかを調査した。調査の結果、「わかりやすい版」では語表記の統一や語種・品詞に関する工夫、複雑な文構造の回避など、リーダビリティについても幅広く配慮されていることが理解された。レジビリティについてはより徹底されている傾向があり、いわゆる「見やすさ」は「わかりやすい版」において重視され、工夫されやすい点であることが確認された。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3305】

外国人居住者の日本語使用に対する当事者評価
—単言語使用地域出身者と多言語使用地域出身者の言語習慣との関わりを中心に—

高 民定, 村岡 英裕

本研究は、グローバル化する日本の多言語環境で暮らす外国人居住者の日本語の習得問題に関して、特に日本語の使用意識と能力に対する当事者評価と、来日前の言語環境および来日後の日本語使用に対する通時的評価との関わりを明らかにすることを目的とする。関東圏に住む外国人居住者81名（留学生及び社会人）について、「出身地域では単言語中心だが、日本では母語と日本語の2言語を主として使用するA-1グループ」と「出身地域でも日本でも多言語使用のB-2グループ」に焦点をあて、アンケートと言語バイオグラフィー・インタビューにより、2つのグループの言語使用意識と日本語の言語能力についての当事者評価を分析した。分析の結果、日本語規範に対する志向はB-1よりもA-1のほうが強いことが明らかになった。外国人居住者の日本語の習得問題の解明の手がかりとして、言語環境や言語バイオグラフィーの通時的考察の重要性が示唆された。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3305】

ヘッジ使用における逆行転移の可能性
—中国人日本語学習者の「不同意」行為をデータとして—

堀田 智子

目標言語の習熟度の高い第二言語学習者は、第二言語 (L2) が第一言語 (L1) の使用に影響することがある。このような「逆行転移」を語用論の観点から考察した研究は非常に限られているが、従来行われてきた母語転移だけでなく、逆行転移も併せて検証することにより、学習者の中間言語体系の解明に近づくとと思われる。

そこで本研究では、中国人上級日本語学習者による「不同意」行為をデータとして、これまであまり注目されてこなかった「ヘッジ (迂言的表現)」に注目し、L1における言語的特徴を探るとともに、逆行転移の可能性を検証した。分析の結果、使用頻度にはL1が大きく関与し、使用する言語形式にはL1ではなくL2の語用論的特徴の影響を受けることが明らかになった。以上のことから、第二言語学習者のヘッジ使用には、従来の研究で指摘されているL1からL2の母語転移だけでなく、L2からL1という逆行転移が生じる可能性が高いことが示唆された。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00—15:15)

【3305】

香港における言語市場と日本語教育の変容
—民間日本語学校を事例として—

青山 玲二郎

本稿は香港における言語市場の変容を分析する。香港では中国語と英語が公用語であり、話し言葉として一般的に広東語が使われているが、1997年の主権返還以来、北京語の影響力が急速に高まっている。このような多様な言語環境において日本語は特殊な位置を占めてきた。1960年代から日本製品や日本文化が多大な影響を与えており日本語学習は将来の就業や所得増に繋がる魅力的な投資と考えられてきた。

しかしグローバル経済における日本市場の占める割合は減少しており、韓流の席卷に代表されるようにアジア地域における文化的趣向は多様化している。2010年以降、日本語能力試験応募者も減少し日本語学習者数も増加していない。本研究では香港の民間日本語学校で日本語を学ぶ学習者、日本語を教える教師、学校を運営する経営者を対象に調査を実施し、学習者の低年齢化、資格試験の重視、ポップカルチャーの影響を論点として提示する。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3305】

香港の高等教育機関で日本語を主専攻とする学生の学び
—学習意欲と学習ストラテジーのミスマッチ—

羅 安碧

学習成果すなわちラーニング・アウトカムズ (learning outcomes) は、学習者動機と学習方略が左右すると言えよう。一般に内発的に動機づけられた学習者は学習を深めようとし、アイデアや問題を批判的に分析する、いわばジョン・ビッグス (Biggs 2001) が提唱した「Deep Approach」を用いる。そして、学習を浅くとらえて、学習を浅くすませようとする学習者が「Surface Approach」といわれる。しかし、学習動機と学習ストラテジーは必ずしも一致するものではない。内発的に動機づけられた学習者が、学習過程で学習環境の影響を受けて浅い姿勢で学習を進めてしまうこともある。日本語学習者の学習動機・学習ストラテジーを把握することは、学習者の学習成果を向上するために有意義だと思われる。本論は香港のある高等教育機関で日本語を学ぶ専攻学習者を対象として、学習への取り組みを明らかにするものである。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3308】

会話における副詞的成分「たしかに」の認知プロセスの特徴

岩崎 拓也

本発表では、副詞的成分「たしかに」を分析対象とし、「たしかに」が、どのような、認知プロセスを経て発話されているか、というメカニズムを明らかにした上で、なぜ「たしかに」の発話後に逆接の表現が発話されるのかを考察した。分析データは、同性の大学生の親しい一対一の会話を収録したデータである。

分析の結果、先行文脈の発話を、自身の既知情報や経験、知識を基にスキヤニングを行い、その時完全に同一であった場合に、そのスキヤニング結果を他の参加者に伝達するために、「たしかに」と発話する、というプロセスが明らかになった。また、発話後に逆接が来る理由として、(1)スキヤニング終了後、ズレの存在に気づいた場合に修正を行うため、または、(2)聞き手が自らの考える導かれるべき帰結まで到達していないと判断した際に、「たしかに」の発話者と聞き手が逆接の表現を使用すると考察した。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3308】

誤解研究の意義
—発話の字義的意味と行為としての意味の不可分性—

岡久 太郎

本研究では、相互行為で生じる誤解を統一的に捉える枠組みを提案するとともに誤解が相互行為における発話理解のメカニズムを明らかにするために不可欠な研究対象であることを示す。これまでの誤解研究は、発話処理の過程を解明するために発話の字義的意味の誤解に着目したものと誤解を生じさせる社会的要因を明らかにするために発話の行為としての意味に着目したものとに大別できる。本研究では、自然会話や映画等に見られる誤解を分析し、発話の字義的意味と行為としての意味の区分は困難であり、発話はコンテクストに埋め込まれた記号として一括して解釈されていると主張する。この見方は、通常相互行為の観察だけでは、ある発話がいかなる文脈情報とともに理解されているのかを明らかにすることが困難であるという問題を孕むが、各参加者が発話理解に利用した情報を特定しやすい誤解の事例を観察することで、その問題を克服することが可能となる。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3308】

沈黙は誰に属するのか
—語用実践行為としての沈黙の主体—

種市 瑛

本発表は、沈黙を「語用実践行為 (pragmatic act)」(Mey, 2001)として捉えた上で、誰が沈黙者になり得るのかについて論じる。語用実践行為としての沈黙は、相互行為の中でコンテキストにより状況づけられ、解釈される。従って同一の沈黙であったとしても、沈黙者についての解釈は、状況に非常に依存している。しかしながら従来の主要な先行研究では、言語行為論の枠組みに立ち、話し手の視点から沈黙を解釈する傾向が見られ、聞き手による沈黙行為がじゅうぶんに検討されていない。そのため本発表では、新たに「語用実践行為」という観点から、沈黙を話し手だけでなく、聞き手による行為として捉えなおす。発表では具体例をあげながら説明を加え、会話中に生じた沈黙がどのように解釈されたのかについて考察を行なう。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3308】

日本語の間接依頼発話行為における「慣習性」
—障害仮説に基づく検討—

張麗

間接発話行為 (Indirect Speech Acts, 以下はISAと称する) の慣習性に関して研究者の間で意見が分かれている。Gibbs (1986) はISAの慣習性は文脈によって異なるという障害仮説 (Obstacle Hypothesis) を提唱し、人が障害に応じて依頼発話を使い分けることを示唆している。しかし、それは文レベルでの分析に過ぎず、日本語の依頼発話行為は、授受動詞を付けた表現が多く、文レベルでの依頼表現を使い分けるといふ障害仮説が説明できないと考えられる。その障害にどのように対処するのかを検討するためには、談話レベルでの考察が必要である。そこで、本研究では、間接依頼発話行為の慣習性が文脈に応じて変化するのかどうか、文レベルと談話レベルの両面から障害仮説を用いて検討した。日本語母語話者21名を対象に、談話完成テストを用いて調査を行った結果、障害による慣習性は、文レベルでは変化が見られなかったが、談話レベルでは変化が見られた。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3310】

「今」、「最近」の自己と英語と英語学習
—相互行為的視座による態度, アイデンティティ, 英語学習動機へのアプローチ—

岡田 悠佑

本研究の目的は、英語学習動機付け研究への新たなアプローチとして社会・相互行為の視座から、英語学習者が相互行為の中で英語及び英語学習への評価として態度を示すことでどのようなアイデンティティを関連付け何を成そうとしているのかを解明し、学習者の英語及び英語学習に対するアイデンティティ変容に必要な教育的取組を議論することである。英語学習動機づけに関する学生及び院生計5組のフォーカスグループの内、学習者が現在の態度を明示的に示す「今」及び「最近」という言葉を使用した10事例の会話分析が明らかとした、「英語学習が将来に関係していると思っている」等の研究者の質問が前提とする学習者アイデンティティ像に逆らう態度を取ることが自分たちの思う自分たちにとっては〈普通〉であることをする学習者に対して、教育機関が取るべき対策の1つとしてアイデンティティの変容を目指した言語社会化の取組を提案する。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3310】

日本人と外国人の英語会話における対人関係の構築
—English (英語) をめぐるやりとりに焦点をあてて—

山本 綾

日本人と外国人が英語で会話をするとき、それぞれ何者として参加し、また相手を何者と見なしているのだろうか。何者であるかという自他のとらえ方は、どのように変化あるいは定着していくのだろうか。こうした問いに対する答えを探るために、本研究では初対面の日本人と英語圏出身者が英語で行った雑談を資料として、両者の関係性について量的・質的分析を試みた。その結果、以下の知見を得た。

- 両者のやりとりでは、しばしば英語についての言及がなされる
- 主に、日本人参加者の英語運用能力や学習法に焦点があてられる
- 会話開始直後から終結部に至るまで、様々な話題の合間をぬって、英語学習をめぐる相互行為が繰り返し立ち現れる。まず、日本人参加者＝英語学習者という成員カテゴリーが呈示される。以降、「教える－教わる」という両者の関係性が共有され、折に触れて前景化される。この関係性は終結部で再確認される。

<<口頭発表>> (3月20日 13:00-15:15)

【3310】

日本人大学生が持っている英語に対するイメージと英語母語話者主義が与えている影響について

五十嵐 優子

最近の英語教育では「英語母語話者の英語を学習者の習得ターゲットとするのではなく、世界で話されている様々な英語と英語使用者の多様性に適応できる英語力を身に付けさせるための教育をする」という新しい考え方が出てきている。筆者は日本人大学生を対象に、英語と英語使用者の多様性を大学で学んだ学生がどのような英語を習得したいと考えているのかと英語母語話者主義が大学生の考える「英語」にどのような影響を及ぼしているのかを調査した。調査の結果から、多くの被験者はアメリカ英語を習得したいと考え、英語と英語使用者の多様性に適応する英語力を身に付けようという考えには至っていないことがわかった。この多様性に適応できる英語力を身に付けるという考え方を日本で広めていくためには多様性を教えて認識してもらっただけではなく、アメリカ英語に対するイメージとステータスを考えて英語を教えることが必要なのではないかと考える。